

伝承あすか

第二十二号

新元号「令和」と 古代の元号・暦・時間

明日香村教育委員会文化財課

課長 相原嘉之

はじめに「令和」改元

初春令月、気淑風和、

梅披鏡前之粉、蘭香珮後之薫

平成三十一年四月三十日をもって、天皇陛下が退位され、翌五月一日には新天皇が即位、元号が「令和」元年に変わりました。「大化」から数えて、実に二八四番目の元号となります。

この元号の出典は、我が国最古の歌集『万葉集』からでした。これまでは中国古典からの出典が多かったのですが、今回は国書からの出典というところも注目されます。

しかも、それが『万葉集』であったことはうれしく思います。

今回の出典は万葉集の歌そのものではなく、歌の序文にあたる文章です。

天平二年（七三〇）正月十三日、

大宰府の師匠で

ある大伴旅人の家に集まって、梅花の宴を催しました。「時あたかも新春の好き月、空気は美しく風はやわらかに、梅は美女の鏡の前に装う白粉のごとく白く咲き、蘭は身を飾った香の如きかおりをただよわせている」という意味になります。人々が美しく、心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つという思いが込められているそうです。

元号のはじまりと改元

そもそも元号とは中国を中心とする漢字文化圏での紀年法で、紀元前一四〇年の前漢の武帝の時代に始まりました。日本でも、八世紀はじめの「律令法」によってはじまりました。

その元号のはじまりは、蘇我蝦夷・入鹿を倒した乙巳の変の後、新政権が難波で改革をおこなった「大化改新」でも有名な六四五年の「大化」です。その後、断続的に「白雉」

「朱鳥」と続きますが、七〇一年に「大宝」の元号が建てられ、以降、今回の「令和」まで続く元号文化が始まりました。

その意味で、日本最初の元号は「大化」ですが、現在まで継続的に続く元号のはじまりは「大宝」ということになります。

このような元号の改元理由には、いくつかのパターンがあります。まず「代始改元」です。

孝徳天皇や元正天皇・聖武天皇などは、天皇の即位に合わせての改元をしています。次に、在位中に希少な亀や鳥などの吉瑞が出現すると、天皇の徳があるからとして、改元することがあります。これを「祥瑞改元」といい、白雉・大宝・和銅・霊龜などがありません。平安時代になると、祥瑞とは反対に災異が天の戒めとみての「災異改元」もありました。延喜・宝永

などがこれにあたります。

このように、改元の理由は様々ですが、飛鳥時代〜奈良時代においては、「代始改元」「祥瑞改元」が多いという傾向があります。

これに対して現在は、元号法によって、皇位の継承があった場合に限って改める、つまり「代始改元」だけとなっています。



「棚田の早春」撮影・上山好康氏

考古資料からみた年記表記

元号を使うまで、我が国の年記はどのように記されていたのでしょうか？ 中国からもたらされた三世紀の三角縁神獸鏡などは「景初三年」（二三九）など、中国の元号が記されています。

一方、日本では、「辛亥年七月中記」（四七一・稲荷山古墳出土鉄剣・埼玉県行田市）や「癸未年八月」（五〇三・隅田八幡宮所蔵人物画像鏡・和歌山県橋本市）のように、五〜六世紀の銘文には十干十二支による表記がされています。これは飛鳥時代になっても同様で、難波宮跡で出土した「戊申年」木簡（六四八）や飛鳥池工房遺跡出土の「丁丑年十二月三野国刀支評次米」木簡（六七七）、藤原宮跡出土「庚子年四月若佐國小丹生評」木簡（七〇〇）が見つかっています。

しかし、七〇一年になると、木簡や文書の年号が干支から元号に変わります。例えば、藤原京跡から出土した「大寶二年八月十三日」（七〇二）や「太寶三年十一月十二日御野国榆皮十斤」（七〇三）からもわかります。

やはり、七〇〇年以前は干支で表記し、七〇一年以降は元号で表記されています。これは大宝令の儀

制令で、公文書には元号を記せとされていることを忠実に実行していたことを示しています。

ここで注目されるのは、「大化」の元号です。難波宮跡で出土した六四八年の「戊申年」木簡は干支で記されています。政権中枢の難波宮の近くで出土した木簡にも、元号ではなく干支年記が記されていたことは、「大化」の元号が一般には広まっておらず、宮内内の一帯だけで利用されていたものと考えられています。これは「白雉」「朱鳥」と断続的にしか続かないことから窺えます。この理由は、元号が国家の独立性を示すことから、対外的には公式に使用せず、唐の意向を意識して、配慮していたのかもしれませんが。

元号と暦と時間

古代の制度で、元号をはじめ、暦の作成や時間を管理管轄する役割に中務省陰陽寮があります。現在でいうと、国立天文台の役割を果たしており、これに加えて、占星術も行っていました。

天武四年（六七五）には占星台を建設しており、キトラ古墳石室の天井には、東アジア現存最古の本格的な天文図が描かれていることは有名

です。天体を観察し、その天からのシグナルを陰陽師に報告し、陰陽師がこれを占います。これらの星の運行は、暦の作成にも反映されました。実際、石神遺跡では持統三年（六八九）の具注暦木簡が出土しています。そして、日々の時間の管理と時報は、漏刻（水時計）で行われました。斉明六年五月に中大兄皇子が「初めて漏刻を造る」と記されています。

総括く時を司るく

元号・暦・時間を管理・発布するのは、天皇にのみ許された特権です。時を司ることににより、民と同じ時間で管理していたのです。このことは、天皇を頂点とする国家を造ることを意味しています。そして、元号を使用することは、東アジア世界の中で、独立したひとつの国家であること、国内外に表明しているのです。まさに「日本国」の誕生を宣言しているようなものです。

中国ではじまった元号文化ですが、東アジアで現在まで一三〇〇年も継続して使用しているのは日本だけです。今後も人々が美しく、心を寄せ合う中で、生まれたこの日本文化を大切にしていきたいと思えます。

たまゆら

「ここに地果て、海始まる」

明日香村伝承芸能保存会

会長 岡崎義男

この表題は、ユーラシア大陸最西端、ポルトガルの「ロカ岬」にある石碑に刻まれた一節です。

十六世紀、ポルトガル史上最大の詩人、ルイス・デ・カモンイスが著わした叙事詩「ウズ・ルジアタス」（現在のポルトガルの人々の意）に出てくる一節です。

十五世紀になると、それまでのマルコ・ポーロの「東方見聞録」に著わされているように、大陸内の東西交易から、マゼランやヴァスコ・ダ・ガマは海に向こうに活路を求め、大海原に帆を進めました。大航海時代の始まりで



出典：ウィキメディア・コモンズ



す。ポルトガルは西アフリカをはじめ、十五世紀半ばにはインド、マレー半島、中国のマカオに進出し、一五四三年には種子島に漂着して鉄砲を伝えていきます。新航路の発見はポルトガルに栄光と繁栄をもたらしました。今では大きく時代が変わるときや、新しい社会の到来を希求するときなど「ここに地果て、海始まる」という言葉はピタリだと思えます。

「平成」から「令和」に変わりました。とりましてはこの上ない慶びです。

「令和」の典拠は「万葉集」からですから、保存会の「萬葉朗唱」の部員長を務められました、中西進先生、奈良県立万葉文化館であり、ご指導を頂いているのが、犬養孝先生の薫陶を受けられた、犬養万葉記念館長岡本三千代先生です。

明日香に絶好の風が吹いて来ました。保存会という帆に「令和」という順風をうけて、「ここに地果て、海始まる」の心で頑張りたいと思います。

ヒスパニアを回復し、その主となった人々だ。それからカステイリヤと並んでベティス、レオン、グラナダ。

二〇

わが王国ルシタニアはこのヒスパニアにある、全ヨーロッパの頭の、いわば頂の位置を占めて。そしてここで陸は終わり、海が始まっているのだ。それにまたポイボスが大洋で憩う地でもある。この王国は正しい天の願いに応え、かつてよこしまなイスラム教徒と戦って武勲をあげ、これをこの地から逐い払い、暑いアフリカでもなお警戒心を解くのを許していない。

二一

これこそ、わが愛する祖国、運命の微笑む国だ。いまわたしが携わっている企てを果たし、

あすかなもでおど

明日香南無天踊り

南無天踊り

松川 和

私が南無天踊りを始めたきっかけは、小学生三年生の時の運動会で、みんな南無天踊りを踊ったことです。正直、運動会までは南無天踊りのことはあまり知りませんでした。でも、練習を重ねていくことに、だんだん興味がわいてきました。

初めて南無天踊りの練習場所に行った時は不安でいっぱいでした。子供は私一人だけで、振りも小学校と違って、難しそうでした。でも、そんなことを思っていた私とは裏腹に、南無天の皆さんは優しく接してくれました。

初めは人前で発表するのがすごく恥ずかしくて、家族にはよく「お客さんはカボチャ！」と言われました。今でもたまにその言葉を思い出して、お客さんがカボチャに見えるように、頑張ろうとするときがあります。が、なかなかカボチャには見えません……。でも、何回も発表しているうちに、だんだん人前にも慣れてきました。見て下さったお客さんが、

最後に話しかけてくれたりするとやっつけて良かったと思います。

そして、二年程前に、私はある友達の子二人を南無天踊りに誘ってみました。すると、しばらくしてその二人が、南無天に入ってくれたことになりました。今まで一人で寂しかった私は、ものすごくうれしかったです。さらに！ そのうちの一人には弟が二人いるのですが、最近、その二人ともが入ってくれたので、今まで以上ににぎやかになりました。

さらにさらに！ 今新しく女の子が一人入ってくれました！

今は子供が六人になり、楽しく練習しています。大人の人は、「平均年齢、だいぶ下がったなあ」と言っていました。

これからも、子供の数が少しでも増えたらいいなと思います。もし増えなかったとしても、私たちはこれからも頑張っていきたいです。

（私は、南無天踊りに入ってくれた女の子達に誘われて、万葉朗唱の活動もしています。しかし、そちらも子供の数が減っています。一人でも多く、興味を持ってくれる人が増えることを願っています。）

やくもごと

八雲琴

脇田初枝

平成三十年度聖徳中学校総合学
習・明日香学で八雲琴を勉強した、
三年生四名の感想文です。

（昨年末に提出された分）

拝啓 師走に入りとても寒い日が
続いています。先生方はいかがが
お過ごしでしょうか。私たち四人は今
受験に向けて頑張っています。先生
方がいつも優しく丁寧に八雲琴につ
いて教えて下さったり、八雲琴の演
奏を指導して下さいました。おかげ
で、私たちの大きな舞台であった光
の回廊、聖中祭の発表を成功させる
ことができました。

私たちは約二年間、先生方に八
雲琴を教えてもらい、たくさん成長
することができました。

今までは、楽譜に並べられた音を
正しく弾くことだけで精一杯でし
たが、練習を重ねていくことで、み
んなで音を綺麗に合わせることや、
曲に込めた思いが聴いて下さっている
方々に、より伝わるように弾くこと
を意識できるようになりました。と
ても貴重な体験をすることができ、

先生方への感謝の気持ちでいっぱい
です。本当にありがとうございます。
た。

私たち四人とも高校生になっても
続けようと思っていますので、今後と
もご指導よろしくお願ひします。

十二月十九日

聖徳中学校・明日香学四分科会

八雲琴三年生一同

先生方

八雲琴とわたし

松川 優衣

私は、小学校三年生のときに、友
達に誘ってもらい、八雲琴を習いは
じめました。はじめたころは、同級
生は二人だけで、知っている人もあ
まりいなかった。毎回毎回ドキ
ドキしていました。でも、八雲琴を
教えてくださった先生方が、私
たちに優しく丁寧に指導してくだ
さったおかげで、はやく周りの空気
になじむことができました。

それからは、週一回の練習に行く
のが楽しみになり、少しずつ綺麗な
音色をだせるようになっていきまし
た。少しずつ自信がもててきたころ
に、替手を一人で一音も間違えず
に弾いているかっこいい先輩を見つ
けました。その先輩は、一音一音に思
いをこめて弾いていて、その音に感動

し、「私もこんなふうには
弾けるようになりたい。」と
思いはじめ、これまで以上
に八雲琴を練習するよう
になりました。

中学生になると忙しく
なり、あまり練習に行け
なくなりました。でも幸い
明日香学で八雲琴を勉強
できる機会をもらうこと
ができ、仲間も四人に増え
ました。先生方や先輩方
にアドバイスをもらいな
がら、私たちの思いを音に込
めて弾けるようになってい
きました。

これで明日香学として八
雲琴を勉強するのは終わ
りですが、高校生になっ
ても続けていきたいと思っ
ています。これからも明日香
村の貴重な伝承芸能であ
る八雲琴を弾ける喜びと
誇りをもって、もっとたく
さんの方に美しい八雲琴の
音色を届けていきたい
です。

最後に、今まで約七年間八雲琴を
指導してくださった先生方、また八
雲琴を応援してくださった方、見
てくださった方、本当にありが
うございました。そして、これ
からも、どうぞよろしくお願ひ
します。

祝 平成31年 新年互礼会

— 明日香村文化協会四十周年記念 —



八雲琴

上西 悠以

私は、小学校のころから、ずっと八
雲琴を弾いてきていますが、こうし
て中学生になってから、ちゃんとして
八雲琴に向き合うのは初めてでし
た。

八雲琴は、今でこそ止まらずにス

奈良県立高取国際高等学校 第八回「伝承芸能鑑賞会」

明日香村伝承芸能保存会

会長 岡崎義男

平成三十一年一月二十四日、恒例になっています、郷土の伝承芸能「八雲琴」と「南無天踊り」を鑑賞して頂きました。

小雪の舞い散る寒い日でしたが学校に付属している八角形の国際ホールは暖房と一年生の生徒さんの熱気で、出演者の顔が上気するほどでした。

生徒さんは落ち着いた雰囲気のかで、楽しく鑑賞して下さいますので、大変演じ甲斐があります。演技終了後、楽器や衣装などの体験活動にも、積極的に参加して下さいましたので、盛り上がりのある鑑賞会になりました。

担当の先生が鑑賞後の生徒さんの感想文をたくさんお送り下さいました。紙面の都合上、四名の方を紹介致します。

Aさんの感想文

保存会の皆さんの演奏を聞いてとても感動しました。これほどにぎやかで明るくて、楽しそうにしていて、思っていたより、ずっとすごかったです。

初め、ホールに入ってきた時、いろ

いろな格好をした人たちがいたので、おどろきました。しかし、演奏が始まると、明るく楽しそうでした。楽器の体験で、ホラ貝や琴、横笛など、どれも難しくて鳴りませんでした。保存会の皆さんは、いとも簡単に吹いておられました。日頃から練習されておられるからだと思います。

私が想像していた保存会の皆さんは、暗めのオーラを少しまとって、八雲琴は、子守歌のようなものをするのかなと思っていましたが、全然違いました。明日香村には古事記、日本書紀の時代より受け継がれてきた伝統的な芸能があることを初めて知りました。

私は歴史が好きで、古事記にも記されている、スサノオノミコトが持っていた「天の詔琴」（八雲琴）をじっくりとさわってみたいと思いました。

Bさんの感想文

保存会の方が挨拶の中で、今回で八回目になりますと話されたのを聞いて、いつもこの日のために一生懸命練習してきたのだなと思いき、しっかり見て、学んで、楽しもうと思いました。

まず初めに、八雲琴で曲を演奏して頂きました。演奏前には、芸能の神様に何回もおじぎをされています。八雲琴の演奏を聞ける機会がなかったので、すごく新鮮みがあり

ました。琴の音は耳にいつまでも残る落ち着いた感じのものでした。次に、南無天踊りの説明をされてから、踊りを披露して下さいました。説明は、まとめてはつきりと話して下さいだったので、すごくわかりやすかったです。



Cさんの感想文

今回の伝承芸能鑑賞会を通して、これは是非残されるべき、素晴らしい文化だと思った。まず発表されたのは、「八雲琴」だった。とても深みのある音色で、心地がよかったです。中々とうとうしてしまっ

長い歴史の中で代々受け継がれ、そのたびに磨きをかけられてきた

であらうと思った。そうでなければあのような音色を奏することは出来ないだろうし、一人だけではあのような演奏をすることは出来ないだろう。ある一定の人数で演奏するからこそ引き出されるものだと思います。

次に発表されたのは「南無天踊り」だ。重々しく心臓の奥深くに響き渡る太鼓の音色とともに、まるで夏祭りに流れるような、小節の効いた声で歌っていた。格好が良いなあと、思った。場面は変わって女性の綺麗な歌声で神様に雨乞いをする場面があった。神秘的で幻想的な感覚を覚えた。縄で作られた「竜」が登場して場を盛り上げる演出にも驚いた。

飛鳥の地にこのような素敵な文化があるとは全く知らなかった。鑑賞会で飛鳥文化の一端を知ることが出来て本当に良かったと思った。

Dさんの感想文

私は、明日香の伝統芸能を初めて耳にしました。楽器や歌、踊りも初めて見るものばかりで新鮮でした。「八雲琴」は二本の絃で弾くもので、音を聴くのは初めてでした。

箏曲部に所属して琴を弾いていますが、大きな違いがあります。楽譜が大きく違います。

箏曲部の楽譜は漢数字で著されていますが、八雲琴はカタカナで書かれていたので驚きました。歌を歌い



ながら演奏するところも違っていた。普段弾いている琴と違ったところを見るのが出来て良かったです。

南無天踊りでは、歴史を学んだ気分になりました。

独特のリズムと歌で、構成された物語は第五部まであり、雨が降らず苦しんでいた人々が、女帝の力によって大雨が降り、感謝と喜びを伝えようとしているのがよくわかりました。歌詞の「天つく、天つく」はいつまでも耳に残りました。踊りや竜の登場は演劇を見ている気分になりました。衣装も個性的で見ているも飽きませんでした。体験する場面では、太鼓、笛、鈴、ホラ貝等があり、みんな一生懸命になって、とても楽

しかったです。今回の鑑賞会で、何もかもが新しく、初めて見るもの、聴くもので感動しました。文化を守り、継いでくれる人々がおられるからこそ、伝統が守られるのだと改めて感じました。

明日香村伝承芸能保存会主催 明日香万葉朗唱講座

講師 犬養万葉記念館館長

実施日 毎月の第四木曜日

（八月休講）

場所 明日香村中央公民館

二階研修室

時間 午後一時～二時半

当日会費（講座受講）・一千円

※定例公演出演者は無料

講座内容

万葉集から、個々の万葉歌が詠まれた時代背景と歴史を学び、季節ごとの万葉歌の解説と、受講生全員で犬養節による朗唱。

年に一回の県外研修実施

今年には和歌山県の施設「万葉館」日程 令和元年五月二十三日（木）集合場所 明日香中央公民館前
バス出発時間 午前九時三〇分
費用 三千円（昼食他）

※朗唱会員は、年に六回の定例公演に出演する。

あすかまんようろうしよう 明日香万葉朗唱

祝・令和元年

勝川 京子

新元号「令和」が発表されました。典拠は日本の国書「万葉集」の梅花の宴「序文」から考えられた言葉ということです。

（万葉集巻五の八一五～八四六）
明日香万葉朗唱は、驚きと感動に包まれました。細々と、何とか継承して行くことを、念頭に努力しているわたし達にとっては、

「万葉の神様、万歳」

と、叫びたい気持ちです。

新元号発表の前夜、四月十三日から再開される平成最後の定例公演に朗唱する万葉歌を選ぶ為に、岡本先生の万葉講座で頂いた資料集を出して、次々と頁を繰っていると、「梅花の宴」の三十二首のプリントが目に残りました。

今年の開花ニュースで、各地の見事に咲いた「梅の花」を観たことを思い出して、「梅花の宴」から、一人一首歌うのも良いし、などと思いつながら、四日後の練習日に、朗唱会員の皆様に提案しようと、ファイルを開きました。

その翌日のことです。
新元号は「令和」

と発表されたのです。

皆様に提案するまでもなく、慌てふためいて、ファイルを開き、「梅花の宴」の資料を捧げ持って、

「序文」の解説と梅花の歌三十二首に、梅花の宴の配席図も付けて、観客用に三〇部コピーして、

会員（森本、福本、森井、河合、岡寄、原、神田、柳谷）が使う、三十二首の訳注も作りしました。

「梅花の宴」の資料（二）
太宰府の地で深まる大伴旅人との親交・山上憶良は七二六（神亀三）

年、筑前国主（元福岡県）に任命され、二年後、太宰師に就任した大伴旅人と出会うのです。

左頁には筑紫文化人、「筑紫歌壇」のおもなメンバーの似顔絵と、梅花の宴の出席者たちです。「梅花の宴」の招待客は「遠の朝廷」の要人と筑紫の知識階級の面々が一堂に集っての宴会でした。

この頁の左上に「第三章万葉人の世界」とあり、これを検索すると、二〇一一年発行で、万葉文化館初代館長の中西進先生監修の「図解雑学 楽しく分かる万葉集」（ナツメ社）の書籍です。

以前、万葉文化館で観たことがある本ですが、こんなに勉強になる、楽しい本とは知らずにいたとは…いたずらに過ぎ去った年月が惜しまれ



だいた大森先生が、毎年のように、春と秋が来ると、必ず言われる言葉がありました。

「万葉人は桜や黄葉（紅葉）の枝を、かざし（挿頭）にしたり、肩に担いで歩いたものです。」

「皆さんも明日香ファッションにはいかがですか」

（そんなことを言われても、今時、枝を担いで歩くなど、そんな風流人は無だろうし、それに、明日香川の桜並木の枝を折ったら、両手が後ろに回るし、桜の花だけを、こっそり二、三輪摘んで帰り、夜中に鏡前で、かざしにして、独り微笑むのはどうだろう：）

巻五の八三二 神司荒氏稲布
（かむずかさくわうじのいなしき）

梅の花 折りてかざせる
うめのはな おりてかざせる

諸人は 今日の間は 楽しくあるべし
もろびと きょう あいだ たのしく あるべし

訳（梅の花を手折って、かざし（挿頭）にしている人びとは、誰もかれも、今日一日は楽しみが尽きないはずだ。）

この歌は梅花の宴の一八番目の歌です。

梅の花を身に飾って、梅見酒を楽しむ。飲めない私にも分かってきました。梅のお花見装束として、宴会を盛り上げ、楽しむための演出だったのですね。

万葉時代は薬用に輸入されて、貴族の庭に植えられていたという「梅」、庭先に積もった白雪と見紛うばかりの白梅の美しさを愛でたように、香りが詠まれたのは平安時代だとか。

四月の定例公演では観客の皆様と、梅花の宴の資料を見ながら、御一緒に、「序」の全文を読み上げて、朗唱会員が、「梅花の歌」から数首を朗唱しました。

他に、舒明天皇の御製歌「国見の歌」（巻一の二）を、山田耕柞作曲の「この道」のメロディーで、魔法のようにすぐに歌える体験をして、「明日香川」を詠んだ歌なら、同じメロディーで、簡単に歌える楽譜（フランス語歌詞付）を見て、観客の皆様と合唱し、私のフランス語万葉歌（巻三の三二四・山部赤人）も朗唱しました。

最後は、橿原市から三十年来の歌の友人、松井よしみ先生の友情出演で、万葉音楽祭で入賞した二曲の演奏があり、「平成」最後の定例公演に、花を添えいただきました。曲目は、持統天皇の御製歌（巻一の二）柿本人麻呂（巻十二の三〇・八七）

「万葉朗唱」とは何？

と思われたら

「万葉集を歌う会」へどうぞ。

この会は、定例公演の練習をしています、「公民館クラブ」です。

毎月一回 第一木曜日

午後一時半～三時、会費無料

中央公民館二階研修室③

明日香村伝承芸能保存会の定例公演について

明日香村伝承芸能保存会は、奈良県立万葉文化館にて、年に六回（四・五・六・九・十・十一月）の各月の土曜日毎に定例公演を実施しています。

場所 奈良県立万葉文化館

時間 午後一時半～二時十分

第一土曜日・蹴鞠

（高松塚公園或は石舞台公園）

第二土曜日・万葉朗唱（玄関前）

第三土曜日・八雲琴（館内ロビー）

第四土曜日・南無天踊り（玄関前）

「伝承あすか」第二十二号

発行 令和元年五月

明日香村伝承芸能保存会

会長 岡崎義男

編集 明日香村伝承芸能保存会

題字 「伝承あすか」勝川喜昭書